

# 福島っ子とともに 「生きる力」を

「保養」・「移動教室」、そして「交流」へ

**5月23日(土) 14:00～16:30 (開場13:30)**

講演：原発事故から4年を経て、福島の子どもたちは  
—「保養」・「移動教室」・「交流」は今こそ必要—  
吉野裕之(NPO法人シャローム災害支援センター)

「こらっせユース」による報告：

大学生が見た檜葉と子どもたち  
リフレッシュプログラムについて

## 吉野裕之さんのプロフィール

福島市出身。大学から社会人を東京で過ごし、その後世界を巡る旅へ。旅の途中で子どもの権利と環境問題に気づく。帰国後、福島に戻って再就職。娘が3歳になった時に原発事故が起きた。2011年8月以降、「シャローム災害支援センター」を拠点として「保養」や「移動教室」を企画・運営しながら、子どもたちの生活範囲での放射能測定を続けている。妻子は京都市に避難中。

「福島子ども・こらっせ神奈川」は、2012年夏から福島県檜葉町の小・中学生を神奈川に招きリフレッシュプログラムを実施していますが、今夏のプログラムのスタートに向け講演会を企画しました。私たちが目指しているのは、学校ぐるみで一定期間、福島を離れて生活し学ぶ「移動教室」の実現ですが、プログラムを重ねていくうちに「交流」の大切さを実感するようになりました。若者の交流体験を「こらっせユース」の大学生が報告します。

数多くの「保養」・「移動教室」を実施してきた吉野さんは、「交流」は福島の、そして受け入れる側の子どもたちにとっても「生きる力」を得るのだと語ります。福島市に身をおきながら子どもたちのために活動を続けている吉野さんならではの、福島の子どもたちの現状、「保養プログラム」・「移動教室」の進展など、貴重なお話を聞くことができます。

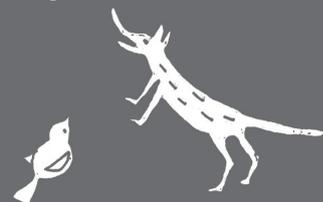
会場：横浜社会福祉センター 8階8F室(JR桜木町駅前)

<http://www.yokohamashakyo.jp/sisyakyo/map.html>

主催：福島子ども・こらっせ神奈川

連絡先：TEL:045-353-9008 FAX:045-353-9998

E-mail: [info@korasse-kanagawa.org](mailto:info@korasse-kanagawa.org)



## － 2015 年キックオフ講演会報告 －

# 福島っ子とともに「生きる力」を 「保養」・「移動教室」、そして「交流」へ

5月23日（土）横浜社会福祉センターで、2015年度「神奈川リフレッシュプログラム」に向けたキックオフ講演会が開かれました。今年のタイトルは「福島っ子とともに『生きる力』を、『保養』・『移動教室』、そして『交流』へ」。約50人が集まり、熱心に講師の話聞き、議論しました。

集会は、まず山際正道代表から「文科省に働きかけて、福島の子どものための県外での『移動教室』に予算がつきました。私たちは残念ながら対象になりませんが、『移動教室』の輪は確実に広がっています。今年も『リフレッシュプログラム』を成功させましょう」とあいさつがありました。

### 保養から移動教室へ

最初に福島で放射線量測定によるマップを作成し、また子どもたちの移動教室を手がけてきたNPO法人シャローム災害支援センターの吉野裕之さんから、「原発事故から4年を経て、福島の子どもたちは－『保養』・『移動教室』・『交流』は今こそ必要－」と題して話がありました。



2011年3月15日の夕方4時に福島市では24.24mSv/hでした。放射線では0.6mSv/hを超えると子供は立ち入り禁止ですから、24.24mSv/hがいかに高かったかが分かります。できるだけ放射線量の低いところに移動することが唯一の対策です。子供は放射線を一回取り込んでも新陳代謝が激しいので、放射線がまったくないところに38日間以上いると、元に戻ります。被曝を溜めないために一定の期間外に出す、これが「保養」の考え方です。

2011年の5月に京都の学生が保養プログラムを始め、多くの民間のプログラムが始まりました。だれもが公平に参加できて、定期的に必ず行けるようにするには、学校ぐるみで取り組むのがベスト。教育委員会や学校に働きかけ、のちに移動教室となりました。2012年2月に全国サミットが開かれ、10月には参議院議員会館で院内集会を経て移動教室の考え方が全国的に広がりました。

伊達市教育委員会は、震災前から1週間集団生活をする「通学合宿」を福島県内の霊山のロッジでやっていました。震災でできなくなり、新潟県見附市でやることになりました。3年間で21校の移動教室をやりました。厳しい財政、大規模校の受け入れ、保護者の理解などの問題がありましたが、「伊達市移動教室支援委員会」をつくり、NPOの協力（シャロームも参加）もあって実現しました。

シャロームではこのほか3件（山形県河北町、川崎市、岩手県遠野市）を手がけています。遠野市では馬屋が一体となった曲がり屋4棟を借り切って180人が泊まったこともあります。自分で作ったわらでわ

らじを作ったりしました。私たちは、河北町週末リフレッシュプログラムを続けてきたのですが、ここでつちかってきたものが移動教室に役立ちました。

移動教室は、子どもたちにとって知らない場所で新しい体験をすることで、自分の地域を見直すきっかけになります。また、クラスでの自分の立ち位置を確認できる機会になって、帰ってからの子どもたちの動きもよくなったという評価もあります。保護者の感想は、心配したけど出してよかったということです。教職員同士の交流で、教え方などで勉強になったようです。

「生きる力」と文科省も言っていますが、自分で課題を発見して解決する力は、「交流」を通じた「体験」でこそ得られると思います。外で遊ぶよりも家の中で遊ぶことを好む傾向が強まっています。運動能力が落ちると、思考力が落ちるので勉強がおろそかになる子も出ていて、福島県教育委員会もプログラムをやったりしていますが改善されていません。

## 子どもサイズの測定でわかったこと

保養・移動教室と別ですが、子どもたちの背丈に合わせた放射線測定を行ってきました。ベビーカーに10cm、50cm、1mの高さに測定器をつけ、全自動で記録できるようにしました。それをマップに位置づけることができます。そうすると地域の放射線量マップができるわけです。同じ地点でも10cm、50cm、1mで測定値は異なります。この3点測定をビデオで撮り映すことも可能にしました。こうして測定すると歩道は高いが車道は低いことが分かります。車道のアスファルトは堅いものを使っていますが、子どもが歩く、歩道は荒いものを使っています。これだけで放射線量が違うことが分かったので、学校にも情報提供しています。表の道の歩道ではなく、堅いアスファルトを使った細い道を歩いた方がいいわけで、これを学校が子供に教えればいいわけです。

徹底して除染を行った公園は大丈夫ですが、子どもは遊んでいません。みんな疑心暗鬼になっているからです。大丈夫なところとダメなところ、こういう情報を共有化すればいい。測る時も近くの保育園の人とか町内会の人に来てもらい、情報を共有するようにしています。

吉野さんの講演に大きな拍手がありました。講演の後、フロアからの質問、意見を受けました。特別支援学級のプログラムのほか、他の地域で受け入れを行っている人などから発言がありました。

## 学生も報告しました



「こらっせユース」の大学生は、二組に分かれて発表しました。

第一組は山崎さん、平戸さんの「大学生が見た檜葉と子どもたち」で、いわき市の仮設住宅にある学童保育を訪問したときの体験談、また檜葉町を車で案内してもらったときの印象を、たくさんの写真を使って語ってくれました。(詳しくは前号の「こらっせ便り」を参照)

第二組は大内さん、日高さんの「リフレッシュプログラムについて」で、2014年夏の山北町と横浜市でおこなった4泊5日のプログラムの内容について、こちらもたくさんの写真を使って報告してくれました。どちらの報告も、パワーポイントを使ったプレゼンテーションが上手で、学生の感性がよく伝わってくる、とてもわかりやすい内容でした。